

一日千秋・待っていた「赤紙」

島根県 大塚 清雄

私は現在大東町塩田に住んでいます。これは戦後八カ村が合併してできた呼び名です。その前は海潮（昔は牛尾）村でした。家族は両親と五人兄弟で私は長男として生まれました。生計は中程度の農業で、父は農閑期を活用して炭焼きをしていました。

私は昭和七年三月に尋常高等小学校を卒業し、家業を手伝い、炭焼きをしながら村の青年学校で全課程を習得し検定に合格しました。このことが後日、軍隊で大変役立ちました。ご存じ出雲の国は神話の国で、素戔嗚尊すさのおみが八岐大蛇やまたのおろちを退治したところがこの付近でした。素戔嗚尊を祭神とする須我神社（国幣大社）や稲田姫を祀る八重垣神社、出雲一の宮（熊野大社）等などの社が有り、昔話の宝庫です。人心穏やかで、人情に厚く、山は緑、水清く、真に長閑で平和な山村地帯です。

昭和十二年十一月に徴兵検査を受け、徴兵官から「第一乙種合格」と言われて、復唱しながら軍隊に行かずにはすんだと内心ほっとしました。翌日役場の兵事係が来て「第一乙種合格は、甲種合格に編入」されるから、その心づもりでいるようにと言って帰りました。

昭和十二年ごろに国民精神総動員運動が始まりました。私は翌年一月十日に松江歩兵第六十三連隊に入隊しました。当日は早朝から近隣の人や友人たちがたくさん見送りに来てくれ、万歳の嵐と旗の波の中を出発し、無事入隊しました。同年兵は百二、三十人だったと思います。

翌日から教育係に「貴様たちは光輝ある六十三の現役兵だ、力一杯訓練するから覚悟せよ」と発破を掛けられ、毎日が起床ラッパから夜の消灯ラッパまで、息つく閑もないほど、鍛錬されましたが、私は青年学校出身だけに他の戦友と比較され、絶えず優位でした。

三月八日の夜の点呼の時、週番司令と中隊長が同道して来られ「第四中隊は明日から連隊長の特別査閲がある」と言い渡されました。緊急処置で第一期の繰り

上げ検閲でした。その夜は戦友たちと「いよいよ出陣だぞ」と語りながら眠りました。二日間、歩兵としての諸教・訓練の査閲が無事終了しました。

三月十二日、独立混成第三旅団に転属のため、松江第六十二連隊を後にし、万歳の声に送られて、宇品に着きました。私は子供の時から、旅行などしなかったものですから、松江から宇品までは大旅行のようでした。

三月十四日、宇品港を出航して瀬戸内海は波穏やかでしたが、玄界灘に出るからは大きな船でしたが、前後左右に大揺れに揺れました。自分には初めての船旅です。歩く、飛ぶ、跳ねると地上においての行動には充分自信がありました。船酔いの経験は初めてでした。全員がぶっ倒れ、生きた心地は無く一刻も早く上陸できることだけ願ったものです。

三月十八日、船は大連港に入って上陸してやれやれと思われました。三月二十日、山海関を通過していよいよ中国大陸だと皆で語りあいました。列車は停車することゝに飯食物の差し入れがあって、何一つ不自由はあ

りませんでした。翌日北京に到着。当時は支那事変の最中でした。

私は独立歩兵第九大隊第二中隊でしたので、青年学校で教科訓練を充分なぐらいやっていました。そのお陰で勤務態度は同年兵の中では最右翼で、上官や古年兵に、事あるごとに「大塚、大塚」と呼ばれて一番先に何事でもやりました。もちろん私的制裁で殴られるのも一番先でした。

六月に一連抜で進級し、四月北京を出発して石家荘空京漢線の警備につきました。引き続いて河南省武安にて初めて強力な八路军の正規部隊と遭遇しました。自分は擲弾筒手でしたが、頭を上げて敵陣を見ることができず、ただ一生懸命に敵陣方向に弾丸を発射していました。夜になっても敵弾は飛んで来ました。暗夜には鉄砲での被害は少ないものでした。敵は地理に詳しいために友軍は大変苦戦しました。この戦闘が自分の初陣でした。

その後重機関銃射手に専任されて、何日も第一線の最先端に出撃して敵と砲火を交えました。重機は、射

手二人、弾薬手二人、狙撃手二人、指揮長（下士官）一人の七人で、その外に歩兵が数人付いて十二、三人で編成されていました。

武安が中隊の拠点基地ですが、絶えず警備任務に出動していました。鉄道沿線とか小部落を占拠守備し、八路军に対して応分の構えをし、少しの油断もできませんでした。邯鄲県に赴き、この地が昔話に出てくる「邯鄲夢の枕だ」と戦友と話したこともありました。

雨期で雨が二週間も続くと、野も道も全部が泥濘となり、膝まで泥に入って歩行に困難しました。また乾期は砂塵が舞い上がって頭のとっぺんから肌着の中間まで泥砂が入りました。このような自然現象は敵より始末が悪かったものです。

昭和十四年一月に河南省から河北省を経て、山西省
惇県に着任しました。同日付で旅団砲兵隊に分遣を命ぜられ、着任すると病馬廠勤務でした。しかも蹄鉄工
とのこと。

野砲や山砲、その他大砲を持っている砲兵隊ですから軍馬は絶対必要です。兵隊の命より軍馬の方が大切

でした。本科の熟練工がいたから馬の足に触ることはなく、自分は馬の引き回し程度で無事任務に服していました。太原の旅団病馬廠に軍馬受領に行けと命ぜられ、一人で十二頭の軍馬を連れて帰った時は大変でした。当時兵員輸送は無蓋車で軍馬は有蓋車でした。一車輛に十二頭の軍馬を乗せて自分は馬と一緒に乗っていて、所構わず糞はする小便はするで困窮しました。

昭和十四年五月から五台作戦がありました。この戦いは原隊が大変苦戦をしているから、一時原隊復帰して戦線に参加出動を命ぜられました。思えば小銃の狙撃手にはじまり、擲弾筒手・重機関銃射手と第一線のみで働いていた自分が、後方の病馬廠なんかは性に合わなかったのです。敵の城壁に向かって麦畑の中を前進しました。敵は瞬時の間隙もなく目茶苦茶に弾丸を撃ち込んできました。「その場に停止」の中隊長の声に全員が麦畑の敵の中に頭を突っ込みました。鉄帽の上をチュチュと唸りながら敵弾が走り去ります。ブチュブチュと音がすると危険です。音によって敵弾の当たることが確認できる程自分も沈着冷静でした。

少し頭を上げて見て驚きました。一面の麦畑が全部銃弾によって刈り取られたようになっていました。また中隊長以下全員が死んだように転がっていて、まるで大休止のようでした。こんな時少しでも動いて敵に発見されたら一斉に十字砲火を浴びて被害を大きくします。全員微動だにせず息を殺してただ待ちの体勢でした。後方砲兵陣からの援護射撃のない限り「待て」の体勢でした。

遙か遠い地平線に真っ赤な夕日が落ちてからが自分たちの戦場となり、敵陣に夜襲を敢行するのです。連携を充分取って、一日散にがむしゃらに突撃しました。敵陣陥落というような戦闘です。クリーク（河）を前にして敵対し、渡河できず夜を待ち、静かに渡河したら、敵は退却してもぬけの殻でした。クリークの水を汲んで飯盒炊飯をし、湯を沸かして、飲食した朝になってクリークを見ると敵の死体がプカプカと四つ五つ浮かんでいました。昨夜の飯も湯も、その人達の血潮が入っていたのです。

昭和十三年五月、和村戦闘参加に始まり、家潤庄付

近戦闘・莊晏付近の戦闘・上園城付近戦闘・晋南肅正戦参加、京漢沿線治安肅正及警備・黄河河畔秋季作戰・南宮付近肅正徹底戦参加、北部山西山地掃蕩戦参加、春季晋南戦参加、五定作戰・西北山西作戰参加などなどの戦闘に出動しています。

陸支機密第二三二号に基づき歩兵第十六連隊留守隊に転属の命令で、昭和十五年七月、原平鎮を出発して列車で塘沽に向かいました（満期除隊列車）。

七月三十日塘沽出港、八月七日宇品上陸、検校後また列車にて新潟県新発田の連隊へと送られました。同年八月十四日、二年八カ月の軍務修了で除隊し、出雲のわが家へと帰路につきました。

昭和十五年八月十五日、無事帰ることができ、村の人達が大勢出迎えて下さって「凱旋おめでとう」と歓迎されました。兵隊に行ってきたら、初めて一人前の男だと言って古老をはじめ皆さんの自分に対する言動が好転しました。

翌日から家業を手伝うことになり、当時木炭の需要が多く一般家庭と違い、自動車までガソリンの代用燃

料として木炭を使用していました。各家庭においても諸事節約せよの布令が出て、配給とか切符の点数制度となりました。人の世話で妻を娶り、一家の柱となり一生懸命働きました。また在郷軍人海潮分会に所属して郷土のために活動しました。世の中は不景気で、外国との貿易も難しいとのことでした。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発しました。今までは日支事変（戦争）でしたが、大東亜戦争と呼称することになりました。南方戦線は日増しに拡大して、毎日のごとく、戦勝、戦勝とニュースが入ってきました。若者が次々と召集されて出征して行きました。私の村には二十歳の若者は自分一人で、十代の子供から女子まで産業戦士だといって軍属や徴用で狩り出されました。それからというもの、村役場の兵事係や小使さんの顔を見ても、自分への赤紙（召集令状）を持って来たかと思えました。夜も寝ていて表戸を風が叩いても「赤紙だ」と思うようでした。日増しに戦況は悪化し、昭和二十年になってからは、日本は負けるのではないかと、人々の口に出るようになり、村の

老人達は「神国日本だ敗戦は絶対しない、必ず勝つ」といっていました。

例年のごとく昭和二十年三月十日が在郷軍人海潮分会の総会でした。自分は世話人として会場の小学校の講堂で会議の最中でした。役場の兵事係が飛び込んで来て「大塚清雄さん」と大声で呼びました。自分は「ハイ」と答えると「おめでとうございます。赤紙です」といいました。待っていたものがようやく来たなと思いました。

実を申せば昭和十五年八月に満期除隊以来四年半も召集が来ず、昭和二十年になってからは若者は全部出征し、女も子供も軍需産業などに動員となり産業戦士として働いているのに、自分一人何故召集がこないのか不思議な気がしていました。今思っても不思議ですが、赤紙の来るのを待っていたという心が本心だったのでしょう。後備役の高年齢軍人も召集されていた。自分は予備役のしかもばりばりの元氣者に何故召集がこないのかと不可解でしたが、ようやく来るものが来て、妻に両親家族を託して壮途につきましました。

「四月八日独立歩兵第六四三大隊補充要員として兵庫県加古川第十九連隊戦車隊第三中隊へ入隊すべし」とのことでした。全員が応召兵で高年齢者ばかりでした。第三中隊長は甲種幹部候補生の新品少尉さんで、兵員は百人程度でした。自分のような野戦下番には中隊長も気を使っていました。

四月十三日出発して博多にて乗船し、任地は朝鮮全羅南道済州島でした。戦車の無い戦車隊で、小銃も五人に一挺程でした。済州島は四国の香川県ぐらいの面積で、中央に漢怒山と言う山があり海拔一千メートルぐらいでした。山の裾野が海岸線でした。中隊は西帰里というところに位置し、材木を拾って来て、屋根には草を載せた俄か作りの小屋を作りました。海岸線は海軍関係の部隊が全島に亘って陣地構築を敢行していました。わが第三中隊は漢怒山の中腹に横穴を掘って、敵を迎撃する準備をしました。食糧の補給が皆無なので各隊は「現地調達」せよとのことでした。

早速、兵員の半数が畑作りを行い、大根や菜葉の栽培に取りかかりました。兵器・弾薬・糧秣もなく、あ

るものは衣服に付いた蚤と虱だけでした。これでは「敗戦」だ、残念だがこれでは処置なしでした。

七月一日、憲兵分隊に派遣を命ぜられ、補助憲兵として勤務しました。着任すると腕章・拳銃（十四年式）長靴を受け取りました。任務は先任者に随行して島内各部隊の状態を見回ることと現地人の監察程度でした。

八月十五日、早朝に「本日正午に天皇陛下の玉音放送がある。全軍に拝聴する様に指示せよ」でした。即日各部隊は武器弾薬を一カ所に集積し、その後小船に積み込んで海上投棄を行い、自分たち自身で武装解除を行いました。

以後なにもせず、ただ食料確保のみで、二カ月いたが、十月十五日に内地引き揚げの命令がきて、逐次、輸送船（米軍の上陸用舟艇）にて帰国しました。自分は最終の船で十月二十五日佐世保に上陸、その足で故郷へ直行しました。

復員後の生活は苦しいものでしたが、農山村のために食料はあったので、都会人のような苦労は少なかったと思います。以前の如く炭焼きと椎茸栽培をしてい

ました。県庁林業課から呼び出され、木炭検査員を指令されました。当時木炭生産地は、西の島根・東の岩手といって日本の二大生産地でした。農林省で講習会があり東京にも行きました。

運命に従い

内地―蒙古間二回の戦務

山形県 大沼 祐三郎

私は大正十三年三月二十七日、山形県東村山郡成生村字小関三九七番地の国井家の三男として生まれました。昭和十六年徴集兵として兵隊検査を受け、現役兵として昭和十七年二月十日、独立歩兵第八十三大隊（勝兵団）要員として、盛岡の歩兵第百五連隊（第四十七師団）へ入営しました。

当時は既に大東亜戦は勃発し、連勝連勝の気運の時でありましたので、初めての軍隊生活の一週間は緊張の連続でありました。しかし、私達はすでに野戦要員

としての入営でありましたから、隊内では客分と同じ扱いで兵舎を仮宿泊しているような状況でありました。

二月十七日、盛岡連隊の営門をラッパの吹奏のうちに出て、駅に向かって出発しました。途中道路の両側には日の丸の小旗を振り、万歳、万歳の声援でありました。あの時の情景と感激は今でも私の心に映っています。年老いたお婆さんが私の顔を見て「万歳、元気で帰って来てね」と励ましてくれました。あの言葉を聞いたとき、自分は思わずほろりと涙が出たことを忘れられません。

輸送列車は貨車で、外は一面の銀世界、寒い貨車の中で、皆で体を寄せ合いながら、翌々日の十九日門司駅に着き、直ちに港から乗船、門司港を出帆。翌二十日朝鮮の釜山港上陸、輸送列車で北上、満支国境の山海関を通過したのは二十三日でありました。二月といえば北支那の地は寒かったです。小便に行ったら小便が凍りついて、つららになっています。

右手に万里の長城を眺めながら列車はさらに走りました。勤務地の山西省汾陽（太原西南方）に到着した